

『翼王の深愛 -楽園でまた君と-』

著：水樹ミア

ill：高星麻子

ミクトに先導されて、シスを囲った一行は地上界で最も高い場所へと向かう。

シスが毎日のように天上界を思って訪れていた場所だ。二度と踏み入ることがないと思っていた空の彼方。何もなければシスはこのまま地上人として成長し、老いて、最期を迎えただろう。ミクトの側妃に迎え入れられ、でもきっと辛いのは数年だけだ。年を取れば飽きられて、あとは穏やかに生きていけたに違いない。

半ばまで上ったところでふと足を止め、地上を見下ろすと、黄金の都は森閑としていた。聞こえてくるのは遠くの森で鳥が飛び立つ音や、大河の流れが岩にぶつかる水音ぐらいだ。こんなに静かな地上界を、シスは初めて体験した。天上人は風の乏しい地上界を不毛の土地だと嫌うが、地上界には地上界のよさがある。シスは再び階段を上り始める。

最上階まで到着すると、背後から付いてきた神官の一人が煙管に火をつけ、シスに持ってきた。

「恐怖を和らげる薬だ。煙を吸いなさい」

シスは断ろうとして、やめた。息を止めて煙管から吐き出された煙を吸うふりをする。胸焼けするくらい甘ったるい匂いがした。

薬の効果は恐怖を和らげるだけではない。薬には身体を痺れさせる作用があったと、前世の母が言っていた。生け贄の逃亡を妨げるためだ。服用しなければ逃げるつもりではないかと心配されてしまうだろう。

母子二代にわたって生け贄になったと言ったら、人々はどんな顔をするのだろう。シスはこっそりと笑った。

「ではシス。役目を果たしなさい」

ミクトは三日間、祭壇に突き刺さったままだった矢を引き抜き、シスに渡してきた。供物の印だ。シスは頭を深く下げて眼下の矢を見詰めた。黒い風切羽の矢だった。トリティの色だ。

全ての準備を終えてミクトと神官達は階段を下りていく。

シスは祭壇の最上階の中央に敷かれた赤い絨毯の上に座り込み、矢を足元に置いた。見上げた空の青は天上界よりも少しだけ薄い。でも、背中の翼を広げ、飛び上がったらどんなに気持ちがいいだろう。だが今のシスは無翼人だ。飛ぶための翼は持っていない。

「来た……」

やがて、どこまでも晴れ渡る空に、黒い粒のようなものが現れた。それはぐんぐんと近付いてきて、翼を持った男性だとわかった。

天上人はシスの見上げる空中で翼を広げて止まった。翼だけではなくはためく衣装まで黒で纏

められていて、青空に浮かぶ姿は少し異様だ。でも、見蕩れてしまう。

(リティ……！)

煌めきを帯びた漆黒の翼。紐で纏められた艶やかな黒髪と意志の強そうな黒い瞳。何より面影がある。シスの記憶のトリティは凜々しい若者だったが、目の前のトリティは雄々しい男性に成長していた。前世の父王にも優る圧倒的な威厳を備えている。

秀でた額には、見覚えのある金細工が飾られていた。翼王を示す冠だ。トリティが翼王に即位した証だった。イシュカには大きさが合わず、普段は仕舞っていたが、トリティにはちょうどよく、そして黒髪に映える。

(ああ、本当にあれは、前世だったのだ)

シスの胸が、目が、熱くなる。

前世に違いないと思いつつ、天上界に行って確かめることもできない記憶を、自分の妄想ではないかと思ったことも数限りない。でも、やはり現実だったのだと、たった今、シスは確信した。途端に、覚えている記憶が脳裏にいくつも閃き、トリティへの気持ちまでもが当時の想いに近付いていく。トリティ、リティ。唯一、自分を慕ってくれた、可愛い……。

「リ……」

「似ている」

呼びかけようとしたシスを、トリティの困惑した表情が止めた。シスは慌てて頭を下げた。

シスの予定では、このまま天上界に連れていってもらい、そこで翼王に会わせて欲しいと頼むはずだった。まさか当人が迎えに来るとは思ってもみなかった。トリティが迎えに来たということは、トリティが生け贄の儀式を決めたのか。何故、どうして。イシュカとの約束を破ってまで決行するという事は、何か事情があるのか、もしかして昔とは変わってしまったのか。

ばさりと翼が起こす風が辺りに吹いて、シスの頭上に影が差した。

「あ……」

次善を考え付く前に、伸びてきた手に顎を掬われる。触れた指が熱くて、その温度が昔と同じで、シスは込み上げてくるものを抑えるように唇を噛んだ。

「こんなことが」

トリティの声は記憶よりも低く男らしいものになっていたが、少し震えているようだった。まさかと吐息で囁き、シスの容貌を凝視する。シスは耐えかねて、顎を掬われた格好のまま小さく頭を振った。覚えてくれていた。それだけで喜びに打ち震えてしまった。

「すまない」

トリティが手を離し、少し後退ったシスに謝ってくる。

「怖がらなくていい。……喋られるか？」

上手く勘違いしてくれたらしい。シスが小さく頷くと、トリティが黒い瞳を細める。

「名前は？」

「シス、と、申します」

シスは再び頭を下げ、質問に答える。

「いくつだ？」

「十七歳です」

「十七……。ああ、地上人は、十八歳で成人だったか」

天上人は成人するのに五十から六十年ほどかかる。十七歳は家の外に出してももらえない幼児だ。

「イシュカ……。いや、サハナという名前に聞き覚えは？」

シスは頭を下げたまま酷く狼狽した。サハナは前世の母の名だ。

「……。八十四年前に、供物に選ばれた神子でしょうか？」

「それだけか？ 血の繋がりは？」

シスは得心して、頭を横に振った。生まれ変わりではなく、血縁関係を疑われたのだ。当たり前だ。生まれ変わりはあるとは言われているが、前世の記憶を引き継いで生まれてきたなんて話は聞いたことがないし、魂の器の肉体は変わるのにまったく同じ容姿なのもおかしい。それより血縁者の可能性の方が現実的だ。

「本当に？」

シスは頷いた。

「淡い色で生まれ付く者の両親はほとんどが淡い色の持ち主ではありません。ですが、先祖には必ず淡い色の者がいると言われているので、まったくの他人とは言えないかもしれませんが」

「……。そうか」

シスの説明にトリティは嘆息した。

「……。地上界は住みよいか？」

「え？ あ、はい。とても」

突然、思いも寄らないことを聞かれて、シスは答えた。トリティの黒い目が切なげに細められる。

「本当に？ 困りごとはないか？」

「な、何も。不自由一つない生活をさせてもらえましたし、友人にも恵まれました」

祭壇の下で今も泣いているのだろうティカが頭を過る。

トリティは無言になる。

何を考えているのだろう。イシュカとシスとの繋がりを考えているのだろうか。

しばらくしてトリティは小さく息を吐き出した。

「生け贄を要求したのは手違いだ」

「手違い……。？」

「そうだ。生け贄、ああ、お前達は供物と呼ぶのだったな。供物はもう必要ない。今後、我らから供物の要求があっても無視して構わない。それを伝えに来ただけだ」

トリティはイシュカの遺思を継いでいてくれたのだ。その事実がシスの胸を熱くする。それなのに何故か気持ちが晴れない。手放しで喜べないのは何故なのか。

「二度と生け贄は要求しないが、例えば妖獣のような地上人の手に負えないようなことがあれば力を貸す。そのときはこの祭壇で火を焚け。煙は二界の境界を超え、天上界にまで届くだろう」

だからとトリティは続けた。

「お前は地上界で、幸せに暮らせ」

「幸せ……」

その言葉はシスの胸に重くのしかかった。

前世で自分が一番望んでいたものだ。翼王の重圧からも義務からも奇異の目からも逃れて、平和に暮らす。今世の自分も平穏に生きることを望んできた。

「ま、待って下さい！」

シスは思わず声を上げていた。

シスから距離を取り、翼を広げて飛び立とうとしていたトリティが再び翼を畳む。

「何だ？」

「僕を、連れて行って下さい」

自分でも何を言っているかわからなかった。

「何を言っている？」

「僕は供物です。あなた方に捧げられるために聖別されたものです。地上に戻ることはできない」

「必要ないと言ったはずだ」

「それでも連れて行って下さい」

繰り返して、シスは悟った。

いくら平和に暮らせても、地上界にはトリティがいないのだ。心許せる友達がいても、人々が優しくしてくれても、トリティがいない。

気付いた瞬間に、満たされていたと思った人生に、ぽっかりと穴が空いた。急にこれまでの十八年弱の人生が虚しく思えてきた。

自分はイシュカだ。イシュカの生まれ変わりだ。そう口にしてしまいそうになっている自分に気付き、自分を諷めた。

それを言って何になるというのか。

生け贄の要求が手違いであった以上、前翼王の生まれ変わりなのだと告白する意味はなくなった。

生まれ変わりなど、トリティを困惑させるだけだ。それとも今さらトリティに自分も好きなのだと告げるつもりか。前世でも叶わない恋だったのに、翼王と男の地上人など釣り合うわけがない。トリティは翼王として子を生す必要がある。いや、十八年も経ったのだ。もう王妃を迎え、子供がいる可能性だってある。

「あ……」

思い当たった瞬間、シスはトリティの黒髪の間隙に隠れていた羽根の耳飾りを見付けた。羽根の耳飾りは、伴侶を持つ天上人の証だ。相手の羽毛を樹脂で固めて金具を取り付け、焦朶を穿つ。

(茶色……)

トリティの耳飾りは綺麗な茶色をしていた。

シスの目の前が真っ暗になった。

トリティは王妃を迎えたのか。自分はずっと記憶の中のトリティに恋い焦がれていたが、トリティは違ったのだ。無理もないではないか。自分は死んだのだから。生きていても結ばれないのに、死んだ人間をいつまでも想うなんて、してはいけない。

「天上界には生け贄の犠牲が必要だと言い張る者達がいる。お前を連れていけば、そういう輩に狙われるだけだ。諦めろ」

衝撃に喘ぎそうになるシスに、トリティは強く諭し、再び翼を広げた。

「あっ」

そのままシスを振り向くことなく、空へと飛び立っていった。

シスはしばらく動けなかった。

「は……」

涙が溢れてきた。止めようと思っても止められない。身体を丸め、嗚咽をこらえる。顔の模様の白が涙で流れて、赤い絨毯に白い汚れが点々と散る。とてもみっともなく思えたが、止まらない。手の甲で、掌で何度も何度も顔を拭いた。

「情けない」

やっと涙が止まって出てきたのはそんな言葉だった。

トリティはイシュカの遺志を引き継いでくれていた。それどころか、イシュカが考えも及ばなかった地上界の今後のことまで考えてくれた。それなのに自分は我が儘を言って困らせてしまった。

(もう少しだけ、リティといたかったから……)

前世は弱く役に立たなかった。今世は何て強欲なのだろう。自分に呆れる。

気を取り直そうと努力しながらのろのろと立ち上がる。

要求が手違いというのだけは気がかりだ。翼王であるトリティと反目する者がいるのか。オリエラだろうか、それとも別の……。

いいや、と、シスは唇を噛み締めた。今度こそ完全に天上界との縁は切れた。いくら自分が考えたところで、真実を知る日は来ない。

空を見上げる。トリティの影も形もなかった。

(ほんの少しでも、会えてよかったじゃないか)

トリティが王妃を迎え、子供を儲け、長く天上界を統治してくれることを前世のイシュカは望んでいたはずだ。

見蕩れるほど立派な翼王に成長した姿を胸に刻み、シスは歩き出す。トリティの言葉をミクト達に伝えなければいけない。泣き過ぎたせいか、ふらつく足取りで階段に向かった。

「どういうことだ」

しばらく下りていった先の小さな踊り場にはミクトと兵士が待ち構えていた。

「ミクト様」

「シス。どうして生きて帰ってきた？」

「ミクト様。天上人はもう二度と供物を要求しないのだと伝えに来られたのです」

「馬鹿な、あり得ない！」

ミクトは叫んだ。

「そもそも痺れ薬を吸わせたのに、どうしてお前は動ける？ 一体、天上人とどんな取引をしたんだ」

「僕は何もしていません」

シスは怯えた。ミクトの形相が見たことのない恐ろしいものになっている。兵士達も青ざめた顔でシスを見上げていた。

「シス。お前は天上人に捧げられたのだ。地上に戻ることは許さない。祭壇に戻りなさい」

ミクトの言葉に兵士達が槍を向けてきた。シスは一步、二歩と階段を上りながら端に追い詰められていく。

「ミクト様、信じて下さい。もしまた供物が必要になれば僕を選んでくれて構いませんから」

「シス、できないのだ。天上人に供物として捧げられた者を生きて返すわけにはいかない。たとえお前の言うことが本当だったとしても、お前が生きて戻りさえしなければ、この祭壇で天上人に命を捧げたのだと言い訳も立つ。だがお前が戻れば、そもいかない。天上人の気に入らない供物を捧げたなど、他国に知られば、我が帝国の存続に関わる」

ミクトの瞳が爛爛としている。

「帝国の存続……？」

シスにはミクトの言葉が理解できなかった。神子として慈しまれたはずだ。他の神子候補と穏やかで満ち足りた日々を過ごしてきた。それは地上界が天上人の庇護下で安寧とするためのはずだ。何故、帝国の存続などが出てくるのか。

「そうだ。我が黄金帝国は、天上人へ供物を差し出すことで、地上界で絶対の存在となった。そして、神子は全て皇帝の養子だ。我が子同然に可愛がってきた神子を捧げる皇帝に民は感謝し、天上人の守護を得た我が国に他国は隷属する」

「そんな、こと……」

「もし天上人が本当に供物をいらないと云ったのだとしても、お前は私のためこの帝国のために供物として死なねばならない」

ミクトの言っていることは天上界で生け贄の儀式の撤廃に反対した大臣達と同じだ。地上人の一人の命は伝統や威信よりも軽い。よりもよって地上人の皇帝がそれを言うのだ。

「どうしてもお前が戻ると言うなら我らはもう一度天上人が気に入るような供物を選び直さねばならない。そうだな、お前と仲のよかったティカといったか。お前が駄目なら、あのような跳ねっ返りの方がよいかもな」

「やめて下さい！ ティカは関係ない！」

地上人は、優しいだけではなかった。強かで、残酷な一面も持ち合わせている。

「ティカが駄目ならティカを殺してその次だ。天上人が受け取りに来るまで供物を捧げ続ける。神子はそのために生かされているのだから」

神子という立場が本当は恐ろしいものだとしスは思い知った。天上人よりか弱く、互いを労り生きていたと思っていた地上人も、結局は同じ人間だった。

「いい加減、大人しく戻れ！」

焦れた兵士から、槍が一本突き出された。

「っ」

シスはそれを避けた。避けた弾みで、足下が崩れる。

あっ、と思ったときには中空に放り出されていた。建物は階段の設けられた場所以外は垂直に切り立っている。

シスは、まさかさまに、墮ちた。

身体は空を向いた。天上界よりは薄いが真っ青だ。

ああ、次に生まれ変わったら、さすがに記憶は引き継げないだろうなと思った。地上人の最後も落ちて終わるなんて酷い偶然だ。

でも……。最後にトリティに出会えてよかった。

できるならもっと話をしたかった。前世で唯一、イシュカを慕ってくれた、可愛いリティ。

「あ……」

空に黒い豆粒が見えた。それがぐんぐんと近付いてくる。落下速度が遅くなる。目を瞬いた直後、シスの身体は柔らかい衝撃とともに逞しい腕にしっかりと包み込まれていた。

間に合ったと、小さな声が聞こえた気がした。

「何故、お前がこんな目に遭わなければならない」

背後からした声は酷く苛立っていた。翼がはためく音が何回かすると、シスの身体は空を駆け上がり、ミクト達の前に出た。ミクトも、兵士達も、真っ青な顔をして、足場の悪い階段の上で何とか跪こうとおろおろしている。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>